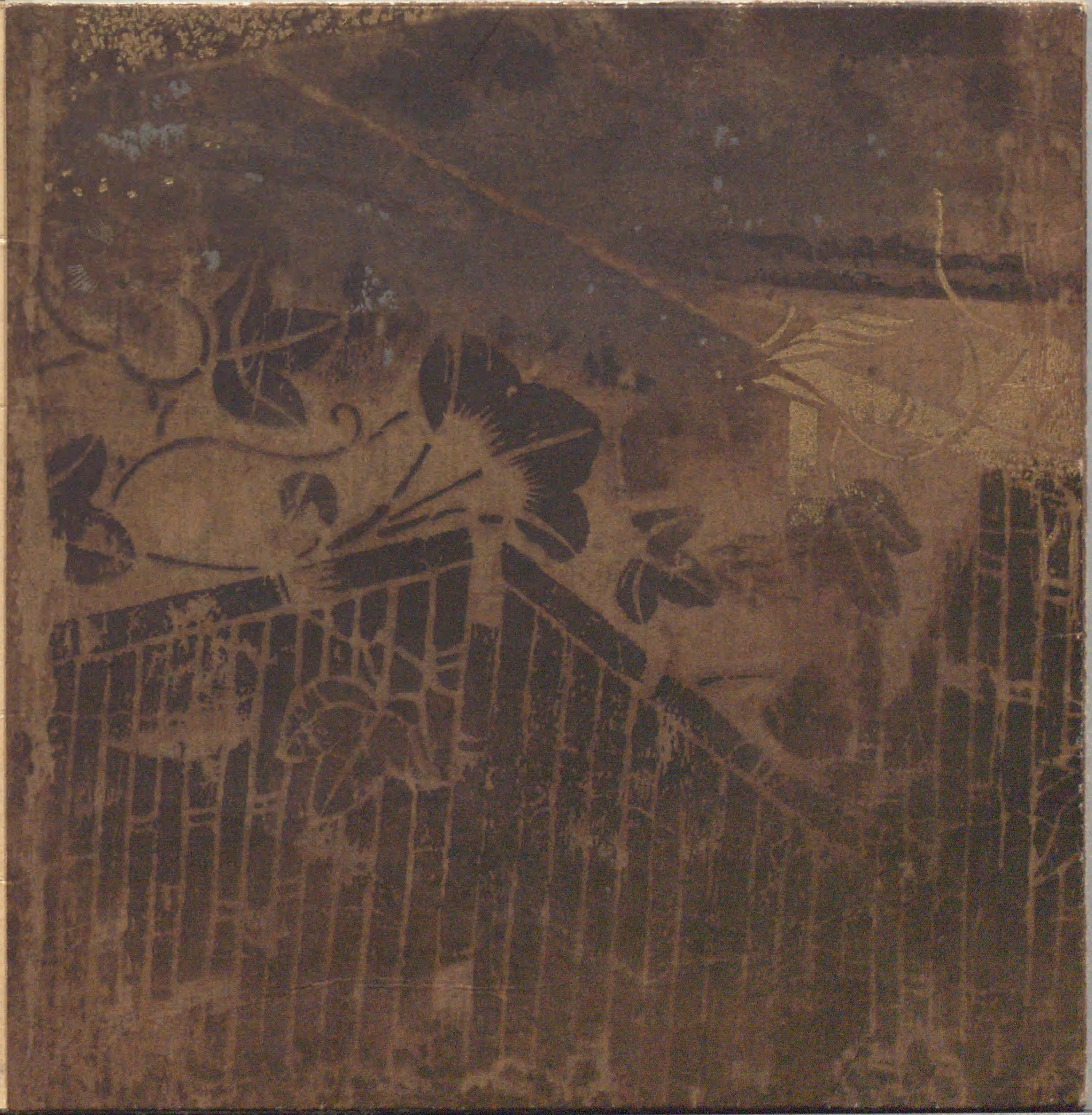
箱あり

915.32
セ
い
軸・箱

濱雅滙書



915.32 ti
国立国会図書館蔵書
国立国会
25.10.21
図書館
216492

国立国会図書館蔵書

をとこもすといふ日記といふ物
をむなもして心みむとてする
なりそれのとしゝはすのはつか
あまりひとひの日のいぬのときに
かとてすそのよしいさゝかもの
にかきつくある人あかたのよとせ
いつとせはてゝれいのことゝも
みなしをへてけゆなとゝりてすむ
たちよりいてゝふねにのるへき

所へまいりまかれこれしせるしらぬ
きくわすとしらはよくらへいら
へくるむねわつる思ひてわう
参るよこゝくにたゝいみしらう
ちよ阿りらね
廿二日はゐたみのくわんをんとたも
らつよ頂き内のおもちゃのときさ
はなお地るねとむまのちもん
数かみしなるもゑてきていと

あやしくさほうみのほとけよりて
ゆさされあへてる
廿三日やきのやすのわさいよんあわ
この人くまかなるすし正いえ
はたの上あのまゝあらゆるわこれ
ろしさはしきやうつてむねの
おいむしくきつるわかみつるやあへ
むくるんのんのはねとしつい
たとつえゝすあるまとんあるねえ
はちするちるむきくるこれたものよ

よそへてほむるよしもなるは
昔論師むすめのたれむくし
まいらせわなるをある上下わらひ
まてこひしれて一文字をとる
きてぬものしかなしえ十文字
よあみてそあるふ
昔日かみのをちよわよひよあ
みもつきこきわよくれていこて
日むらひよひもよごくあるふ
やうそてなくるくわ
昔粧てかみのこちよてなるまなる
し、ぬてしかせて自郎ふまつてよみ
かをくらわからうふこちあけて
かし
いむくわやつやとうたなるしもの
らうもこと人もいひなへちめ
からうこえこれよえかつはやさと
か
うふなるのかみのよめりくる
みやこいそてきみよなるむとこしはやと
こしのゆきふくわつれぬるゆは

とをんてわかれゆくかへるさきのみ
たよめかくる
きみへの浪路をさとゆきりて
わかれこへきえたれるちくよ
ことんこのもあかくれとはつきあ
もすゑしこくいひてさきの
かみいまのもみとをたつて今
のあるしもさきのも手をわかれ
「あひとよんよくるをして
いつよかや

若君はつねにうちとけさせて
こきいしをかくするうちに京まて
うちれたるしをえんなくよ、
てよわくよふせよしいかにあらん
のいつもちいろきをえれとなるよに
もいちに京へかへるよとんなにあ
ふきのみちかならひよるあるへと
手えふつすこのおもふよあるふ
こひとのかきていふせるうい
みやこへと思ふものいかなしきたえ

かつらぬ人のあはれなるかな
みあるはすのく
あふものとわすれかねつゝふきさん
いなるとよろかなしうわる
とゆひくるあひさよかのさきる
いふところよかみてちうみこと
人これられさけるるともてもとい
きいろよたあるそてわろこき
ことをりよかみのさふんへの
なうよこのきさるんてん

あるやうよいそれちのめくかくわつ
れるくいはかのひとのくちあこ
もこれえちまてこのうみへまて
まなひいちせるう
たしと思ふ人をとるとあはれの
うちもてこえわれたきそれ
といひてあかれたいとゐくめて
ゆく人のよめかくる
はなさせとうらひききやこみ
ぬつきんをきみなえなりれ
乃

216492

といふあひるまかちよわちのあそれ
ゑしらてそのわしさんをくとは
はなれてはやくいなむとてきそみ
ちぬれもあさきぬへとさわけい
母よのやちんよきこのたわよある
はしとたまよはきてかるの
うるとも時すよくつてきいふ
又あるんすくよあれとかなしう
いきをいふかくうてみるよなるや

せおちかこうろゆくこゑこあそとよは
ぬとろいみなるここよひうらみよ
とまるあちえこのときやねふち
ちれのもちそへんとをひき
たわ
廿日うちよりやこきこえてたは
みちをふこのあひるよ人やと
のみのこ山くちれ千みねさけよ
きちをもうきてあねよいれわ
ゆくこのみよ

元日にはみなとそとよわかゆ
ましなわちてとうそ白散さ
きくろうてゐ二のきこえん御
わすゝめす

元日彩にはなとそ也白散を
ある物のよ倫とてあすやらう
けしたさめゆくれな風よなき
すゝさせてうみよつせてこのさは
なわぬいもしあらめもちうる
あしかうやうの把もちきくる也
もとめしもをなゝをしあゆの
くちをのみきよんへのくちを
ちあゆもし思みやうあんや
くふえみやこのみうたはらやる、
こへのつとのしりくへるえのふよ
しれかしらえこら本らいつまそ
とそいひあへなる

二日彩にはれみなるとよとされわ備
師ものさけをこせられ

三日にはなし所也もし風なみ

なみは しばしとをしむ心やあらん
心もとなし
四日 風ふけばえいでたゝず
まさつらさけよき物たてまつれり この
かうやうに物もてくる人に なほし
もえあらで いさゝけわざせさす
ものもなし にぎはゝしきやうなれど
まくるこゝちす
五日 風波やまねば なほおなじ所
にあり 人ゝたえずとぶらひにく

六日 きのふのごとし
七日になりぬ おなじみなとにあり
けふはあをむまをおもへどかひ
なし たゞ浪のしろきのみぞみゆる
かゝるほどに人の家の池と名ある
ところより こひはなくて ふなよりはじ
めて かはのもうみのも ことものども
ながびつにになひつゞけておこせたり
わかなぞけふをばしらせたる
うたあり そのうた

あさちふのやとあれたる水茎
池よりみつるわさわかり
いともかしこしこのいけとしまの所
の名なるよき人ぬれたまふきて
くさ書て猶みるなりわたこのあるの
むかしのおきなみれはへよわれはさて
まくれふれたるあきみそてゆなこ
と見えはらつるをうちてうみをと
さへたとへりてきみて降て
かくてこのあひなることたはのか
なふ。やりこ見ふせてきこえん
すのなることろやいはたまひいらむ
これ人うらよほめしとなりよ心あれ
てなわかわとかくいひそてすみの
老川なるこというるへいひてよ
歌なう

ゆくさきよ老の白浪の聲はかりも
をくれてなつむわれやさらん

とろよめるいとたはことなるへし
見てきかする也よみてうは

いつあんこのうへをこれかれ
あそれれやもいひかわせかへし
せま大吉川へき人をはしれをと
これをのみいふか粉をのみくひ
てよあくぬこのうへぬすたさう
はうえすといひてうちぬあるんの
このわらはるむいろうまよみあわ
おれうのかへせんといふたとん
きていとたのきこともれなよみ
つむつやえよみ川へくたいやいへて
といふまうはもそこちぬる人
をこちそよさんとつもとめくるまと
夜あけぬやよやいかていつよくわ
あもくいつよむるをいふかき
からもよこのわらはさすうよも
ちそいたすしひてとへていつるこう
ゆくへもとるも神のるみくつふ
みきそのみこえぬれ月さかくへ
とあんよめるかくはいつきのうつく

しけれはにやあらんいとおもはす
なわらはことにてはなにかは
せむおむなおきなておしつへし
あしくもあれいかにもあれたよりあら
はやらむとておかれぬめり
八日さはることありてなほおなし
ところなりこよひ月はうみに
そいるこれをみてなりひらのきみ
の山のはにけていれすもあらなん
といふうたなんおもほゆるもし
うみへにてよまましかはなみ
たちさへていれすもあらなんと
もよみてましやいまこのうたを
思いてゝある人のよめりける
てる月のなかるゝみれはあまのかは
いつるみなとはうみにさりける
とや
九日のつとめておほみなとより
なはのとまりをおはむとてこき

いてゐわこよれいれおのひよくよの
けうひのうちえとてえをくわる
くる人おまへつなつよ藤原の
ときさね橘のすゑひろきせへれ
四郎をなやさこらすんみうちよわいて
老とうひりよもこゝかしこよをき
くるこのへくろ心さしあるへなわ
ゐふこめひのみめきんわさしい
このうみてもたらさるへこれ
よわいまもこきえるわつゆく

これぞへんをくらんとてうこの人
とゝえをいき仏らかくてこきゆく
俄よりうみのかいとわよきれる
人をとそくなわぬ母のへまん
思ふ教をわぬきしまもいみとや
あるへし母まも思ふとあれとこ
いこえるしいれをこのうちこさきれ
かこえるしか
ごわとまりてやみぬ
思やるんえうみをわるれとも
あみしちふ〻れえしらすやあるん

かくて宇多の松原をゆきすく
その松のかすいくそはくいくち
とせへたりとしらすもとことに
浪うちよせ枝ことにつるそとひ
かふおもしろしと見るにたへす
てふな人のよめるうた
見わたせは松のうれことにすむつるは
ちよのとちとそおもふへらなる
とやこのうたはところを見るにえ
まさらすかくあるを見てこき
くまに〳〵山も海もみなくれ夜ふ
けてにしひむかしも見えすして
てけのことかちとりの心にまかせ
つをのこもならはぬはいともこゝろほそ
しましてをんなはふなそこに
かしらをつきあてゝねをのみな
くかくおもへはふなこかちとりは
ふなうたうたひてなにともおも
へらすそのうたふうたは
はるのゝにてそねをはなく

わかすゝきにてきる〳〵つんたるなを
おやゝまほるらんしうとめ
やくふらんかへらやよむへのうな
ゐもかなせにこはむそらことを
してをきのりわさをしてせにも
もてこすおのれたにこすこれな
らすおほかれとかゝすこれらを
人のわらふをきゝてうみはある
れともこゝろはすこしなきぬかく

ゆきくらしてとまりにいたりておき
な人ひとりたうめひとり
あるかなかに心地あしみしても
のもゝのしたまはてひそまりぬ
十日けふはこのなはのとまりにとまりぬ
十一日あかつきに舟をいたしてむ
ろつをおふ人みなまたねたれ
はうみのありやうもみえすたゝ月
をみてそにしひんかしをはしりける

かゝるあひたにはみれはよあかくて、
あらいれいのともしてひるよ
なおぬいさしたねといふ所よきぬ
わきわらは、この所の名をきゝて
たねといふ所とさかのたねやうよ
やあるといふ瀬にたちさきわらは
のとるれて人わらふ時よあわ
ける女わらはなんこの歌をよめる
瀬とまりてあつきく所たねあるた
ざふことくはみやこへものれ
とていつる事ともをんなもろて
唯く京へものわと男あれなれて
このうらよりらよいあまねとはよ
と思て人、わすれすこおちねと
いふ所とよみてのたいてよう
又むつの人を思いそ侍てける
時よりわすれてけふた瀬にて
たゝのかなしうつるてことはくわ
しはれ人のかすにまねてあるうへよ

かすはたらてそかへるへらなる
といふことを思いてゝ人のよめる
世中に思やれとも子をこふる
おもひにまさるおもひなきかな
といひつゝなん
十二日あめふらす　ふむときこれも
ちかふねのおくれたりしなら
しつよりむろつにきぬ
十三日のあかつきにいさゝかにあめ
ふるしはしありてやみぬ女これ
かれゆあみなとせんとてあたりの
よろしき所におりてゆく　うみを
みやれは
くもゝみな浪とそみゆるあまもかな
いつれかうみととひてしるへく
となんうたよめる　さてとをか
あまりなれは月おもしろし
舟にのりはしめし日より舟には
くれなゐこくよききぬきすそれ

うみの神におちてといひてなに
のあしかけにことつけてほやの
つまのいすし鮨あはひをそこゝろ
にもあらぬはきにあけてみせ
ける
十四日あかつきよりあめふれはおなし
ところにとまれりふなきみ
せちみすさうしものなけれは
むまときよりのちにかちとりのきの
ふつりたりしたひにせになけれは
よねをとりかけておちられぬ
かゝることなほありぬかちとりまた
たひもてきたりよねさけしはしは
くれかちとりけしきあしからす
十五日けふあつきかゆにすくち
をしくなほひのあしけれはゐさ
るほとにそけふはつかあまりへぬ
るいたつらにひをふれはひと〳〵海
をなかめつゝそあるめのわらは
のいへる

たてはたつゐれはまたゐるふく風と
なみとは思ふとちにやあるらん
いふかひなきもののいへるには
よにつかはし
十六日風なみやまねはなほおな
し所にとまれりたゝうみに
浪なくていつしかみさきといふ
ところわたらんとのみなんおもふ
風なみともにやむへくもあらす
ある人のこの浪たつをみてよめる
うた
霜たにもおかぬ方そといふなれと
なみのなかにはゆきそふりける
さて舟にのりし日よりけふ
まてにはつかあまりいつかになりにけり
十七日くもれるくもなくてあかつ
きつくよいとおもしろけれは
舟をいたしてこきゆくこのあひ
たくものうへもうみのそこも

おなしことくになむありける
むへもむかしのをとこはさをはう
かつなみのうへの月をふねはお
そふうみのうちのそらをとはいひ
けむきゝされにきけるなりまたある
人のよめるうた
みなそこの月のうへよりこくふね
のさをにさはるはかつらなるらし
これをきゝてある人の又よめる
かけみれは浪のそこなるひさかたの
そらこきわたるわれそわひしき
かくいふあひたに夜やうやくあけ
~~ろあひたに~~ゆくにかちとりら
くろきくもにはかにいてきぬ
風ふきぬへしみふねかへして
むといひて舟かへるこのあひた雨
ふりぬいとわひし
十八日なほおなし所にありうみ

あらけれは舟いださすこのとまり
とほくみれともちかくみれとも
いとおもしろしかゝれとも
くるしけれはなにこともおもほえす
をとこどちは心やりにやあらんから
うたなといふへし舟もいださて
いたづらなれはある人のよめる
伊そふりのよするいそには年月を
いつともわかぬゆきのみそふる
このうたはつねにせぬ人のこと也

又人のよめる
風による浪のいそにはうくひすも
春もえしらぬ花のみそさく
このうたともをすこしよろしと
きゝて舟のをさしけるおきな
月ころのくるしきこゝろやりによめる
たつ浪を雪か花かと吹風そ
よせつゝ人をはかるへらなる
このうたともを人のなにかといふを

ある人きゝふけりてよめりその
うたよめるもしみそもしあまり
なゝもし人みなえあらてわ
らふやうなりうたぬしいとけ
しきあしくてゑすまねへとも
えまねはすかけりともえよみす
ゑかたかるへしけふたにいひ
かたしましてのちにはいかならん
十九日ひあしけれは舟いたさす

廿日きのふのやうなれは舟いたさす
みな人〻うれへなけく〻
るしくこゝろもとなけれはたゝ日の
へぬるかすをけふいくかはつかみそ
かとかそふれはおよひもそこなは
れぬへしいとわひしよるはいもねす
はつかの月いてにけり山のはも
なくて海のなかよりそいてくる
かやうなるを見てやむかしあへの

仲麿といひける人もろこ
しにわたりてかへりきける時に
舟にのるへき所にてかのくに人
むまのはなむけしわかれをしみて
かしこのからうたつくりなとしける
あかすやありけんはつかのよの月
いつるまてそありけるその月は
海よりそいてけるこれを見てそ
仲まろのぬしわかくにゝかゝる哥
をなん神世より神もよむたひ
いまはかみなかしもの人もかや
うにわかれをしみよろこひもあ
りかなしひもある時にはよむとて
よめりけるうた

あをうなはらふりさけみれは
かすかなるみかさのやまに
いてし月かもとそよめりける
かのくに人きゝしるましくおもほえたれと
されともことのこゝろをゝし

さまをかきいたしてこのことは
傳へたる人にいひしらせけれは
心をやきゝえたりけむいと思ひ
のほかになんめてけるもろこしと
この国とはことことなるものなれと
月の影はおなしことなるへけれは
人の心もおなしことにやあらん
さていまそのかみを思やりてある
人のよめる

みやこにて山のはに見し月なれと
浪より出て浪にこそいれ
廿一日うの時はかりに舟出す
みな人〳〵のふねいつこれを見
れは春の海に秋のこのはしも
ちれるやうにそありけるおほ
ろけの願によりてにやあらむ
風もふかすよき日いてきてこ
きゆくこのあひたにつかはれんとて

つきてくるわれはあかうわらう
すゝなうら
しおほこそくもの方をさへやる
れわちはあわとしなもへ
かつらやとうよそあそれする
うくうよをきてこきくるよ
くろとりとよ鳥いそのうつよあつ
はあわをきやすのいえのゑと浪を
ろくうちよすかつちわのいやう
くろき鳥のさとよしろき浪を
よすとろいよそのことえなをふ
あかねともおいふやうよろき
こゑする人のおとよあえねえ
このむるなわかくいひてゆくる
みなききみする人浪をさへて
くはよわたしめてかいうくむゐ
せむといふあることそなまうへ
は海のえなろしくねえか
しらせ

みれしらけぬあくろちちやうちちへ
海よあるわたるかくれ
わたつみの雪といつくへの白浪と
いさしかさわわたきつまきわ
かちとかへ
廿日よむつのとらわよわこと、
はわをいつゆくたるよ山介
どこの佐たりわあるをのわらい
来よわをたさなくろあるこの

わが母をこくまかる山もゆく
とゝ命をゝ今あやしきにを
うらをろよめるうのうら
ミきつゆく母のえれおし絵の
山さへおくをまつえしらすや
とらいつるたにたさふきわらはのや
そてにつくしくふ海あらけ
にていちよゆきこあわちみの花
けなわあるんのよめる
浪とのみみちつきけといえみ於

ゆきと花とよまつひくるか
廿三日ひてりてくもりぬこのわたり
まかいそくのおそりありといへ
神ほとけをいのる
廿四日きのふのおなし所也
廿五日かちとりらのきたかせあしと
いへは舟いたさすかいそくおひく
といふことたえすきこゆ
廿六日まことにやあらんかいそく
をふといへは夜中はかり舟をい
たしてこきくるみちにたむけす
る所ありかちとりしてぬさたいま
つらするにぬさのひんかしへちれ
はかちとりの申てたてまつる
ことはこのぬさのちる方にみふ
ねすみやかにこかしめたまへと
申てたてまつるをききてあるめの
わらはのよめる

わたつみのちよみのみやよたいせはよろ
ぬさのたひの世やなみのある
とろよめるこのほとよ風のさけ
またかちとわりくちこみてみゆ
ねよかちあけるをよろこふすのを
ときさてわるはもたきちも
い際とをにもへてやあんいふ
くよろこみこのすゝよ阿ちの
こうめといふへのよめるう

たむ風のぬきぬるはへゆ毎も
ほてうちこうれのされ
とろていけのをよみていめる
若日風あき派あるくわえる
ねいるきひこれわかくちけ
くなとこふちのかうつよ日をと
のふめえみやことせしちとい
御ある下のやさすをききてある
きんなのよめる

日をたにもあま雲ちかくみるものを
みやこへと思ふみちのはるけさ
又ある人のよめる
ふく風のたへぬかきりしたちくれは
なみぢはいとゞはるけかりけり
ひとひ風やますつまはちきし
てねぬ夜もすから雨もやます
廿八日　けさも
廿九日ふねいたしてゆくうらゝか
にてりてこきゆくつめのなかくなる
にたるをみて日をかそふれはけふは
ねのひなりけれはきらす　む月
なれは京の子日のこといひいて
松もかなといへとうみなかなれは
かたしかしあるをんなのかきていた
せるうた
おほつかなけふは子日かあまならは
うみまつをたにひかましものを
と

とそいへるうみにてねのひのう
たにてはいかゝあらむまたある人の
よめるうた
けふなれとわかなもつますかすかの
わかこきわたるうらになけれは
かくいひつゝこきゆくおもしろき
ところに舟をよせてこゝやいつこ
ととひけれはとさのとまりといひ
けりむかしとさといひける
ところにすみける女このふねに
ましれりけりそかいひけらく
むかししはしありし所のなくひ
にそあなるあはれといひてよ
めるうた
年ころをすみし所の名にしおへは
きよる浪をもあはれとそみる
とそいへる
卅日あめ風ふかすかいそくはよる

あさきせさきやときこえて夜中
ちかよ舟をいれてあけの
みとをわたる夜すかれて雨
ふりしも念すなとこゑんな
からく神仏をいのりてこのみとを
わたりぬそうのはえわたりぬ
し海とはよ所をすきてたふ
かえといはよ所をやるかくいろ
きて伴つみのまつといはとこん
すゝいでぬけふ海よ浪よこ
まともなし神仏のめくみかう
あねるよふわけふ舟よあわ
し日よわかろあれたみそか
あ海わこぬのよなかよくる
いまえいたみのくまきぬれた
かいそく物なれ
二月一日あしのは海あめふつる
むさはすくわよやみぬれは

いはみのあらといふ所ありて、
こきゆくうみのうへきのよの、
ごとく凪なるみえ、よくろ見ゆき
のますそらをへてゆく所の名え
くろく松本のいろもあれたくいろみ
すみてゆきのごとくよかひのん
ますえうる五しきまはりは
いわろこぬこのあひるくふ、
もここのうらをいふ所よわつまて
ゑきてゆくかくゆくあひさよあ
ふ人のよめるうた
あをくしけたこのうらなみ
たゝぬりえうみをかゝみと
ふれゝ人さらむ
みねあふきみのいはくこの月る
てるやぬることゝあけきてくふ
しきよらつすしうへもいふと
ゑてやわよいる
ゑくまのつまてのあつき春のりたゝ

よるのいねまれわれなへよるか
きく人のたまへやうあるた
ことするとえろうよいあへし
あおかきみのからくえねかいた
してよしとたかつたことをあし
まこうたうへとてはこめきて
やみねよえうるれすみてまれ
えとこうわぬ
二日あめ風やますえをいよき
まのうち神仏をいのる
三日うみのうえきのまあやうる
にれち毋いうさな風のあくこと
やおねたきうしのすみいうへち
これよはこうてすよめちうる
をよわかれききおへたちてる
なみてのこまをぬつぬるあわ
かくうふくれぬ
四日かちとやく〻小風くてのくき

それこそあしといひてかねいこ
さにきわめちつれともむねなとすよ
ちみれきすこのちとわえは
もえはすねからぬありてり
こおとめのたまえくさの
うるえしきかひいつきをまもる
かみいたこむつの人をこれ
はたらねたる人みよめち
よする浪こもちさよせまんわこ
た
ひとわすれのひれおさひれむ
とふてあるひをさすすて舟
のんやのよよめる
ほのひろむきてせしこさを
こゆるをさよさかしのをおさん
ごあんいつふせこのつめまえおや
なさをさくなりぬへしたまあり
はもあかくんをへいろむや
されとも し こかほようわい
とりよ

やうもあわなかれる所よ
いをみることをちけきてある
なんちのよめるうた
てをひてさむいさしもね
いたみなそくむとえるよ
りろろつよなる
昔けよかくしていうみのちる
よわをたのとさわをとよまれ
くろめさするゝあるこわれ

くるしきはなよめるうた
ゆけはかれ行やらいねてものうむ
はたのうるはきしのさうろ
かいさたゝくふにほとよ母とく
こけりのよきよときよちせえ
かちとわ高ることゝよいそく
み母よわたほせよするわあさ
きさみ
いてこぬさきよつふてちやひゝ
とよこのゝとはのうこのやうち
ろち

かちとりのをまのつゝのことはるか
うちとをえうたをつまわたる
のやうなるを りをもあれ
きくへのあやしくうこめきこも
いむつるゝとてかきいうせれ
けよみうもしあふわすれわ
きふ浪あさちるとへひねと
はよいのるしるあわて風すみ
きられいましかもめもわのて

あちふ所あわ京のちゆくようこ
むかしあけわよあるわらいのよめる
うた
行のわくる旅さとさふをあやさと
かもめさつゝよちみをへゆん
とりゆくあかよいはと
いふところの松えらおもらくて
たまへをかしみ鶴みよのわた
りをこきゆくあるへのあるう
いふえつきえもさわぬる住の
乃え

ここ
松よりやさきまつはわれたへまよふわ
むりへいとのちくひとらかねはも
わすれはてよめる　か
ねみのえま毎さしのせよ長草
きるしあやとつれゆくく
とあんうたくへまわすれるむと
まえあそこらきんちーは
しやさめてみてこあるちまよ
せむとあつかくいひてあるめ
川く

くふあらまゆくわあく風ふ
きてこけもとちわてちきよ
しちきてたとくくうちはめ
迎しかちとのいたこの付書の
いは
明神たれしの神ちーぢ
きおちかさすんとかいまめく
夜のさてぬさるとつきわたり
へとふいあみすひてぬれ
君いまるかくいまれともに
風やみていやふきまいやきちよ

かせなみのまやふくれてかちをか
みいそくぬさをえみ心のいのねは
ミふねさゆつぬすめかまなうれ
しとたすかひいたふへきねゝこすわ
たつといはまきこいつよしたのみ
いつはせむとてまれにはこう
ふこあれつゝひちつあるこゝみを
こいふつるとてうみようちそあれ
そくちをしされそうち川くよ
うみそかつみのたさつのとあね
ゆゑある人のよめるうた
ちはやふる神のみあま海よ
かみないそかつみそまれ
ほく数みのにわすれくさきしの
ひめまつるをいふ神みもあるよ
かしめもうてらゝかみる神の
こゝろをこゝろそへつれかちそみ
心ゑ神のみ心なり
六日みなつしのさとよりいてゝ京
よはつきてかえつまよいちみれ

みれなにとくなんれはなきれはる
ひよつはすてよろみとふ
こうれかのふちさひのもから
のしまのおはいこみやとちくもや
ぬとつをよんこれふちろに
よかしらみもいくてかくういる
いつのといふせるするよいる
あこきうけてみ舟さすくら
いやたもなのほつちる人のいれた
ひとくあやしるこわかするよ
こいちるやむふれきみはくめ
てふれさひしこうつかしみる
ほすえますきわすりといひる
七日ふ河しかる舟いわつちて
こきのほするよ河の火なりすやこ
わつふ舟のほるといやうこ
かるあなうふれまみの病者
毛とよわこちくき人すてから
やふみとさらゝさてしさりくり
かれともあはちいうめのうてよ

めて、みや、こ、ほにこりにをやあらん
からくてあやしきうらなり
いさわろのうらい
きときて天河の水地の水を重さと
母もわつさもちるしゆみつれ
これてやうひをすれちてよめる
ちるへしはうつこよある
けていまひら
さて夢よ母すやまおわるあよ
みつのみのあさきさなりつか
このうらみやこちくなおぬる
よろこひさふへ教しつりつれ
るへしあはちのこのうらよおと
れりはさきいくさしまりもの
なとくやしうらうちよよるまふ
わてけよけや
八日るほ河のちわるなつみて
こわのひのみそきをいふほとわる
ときるこよひふるまみいなみ
やまひおこりていくるやむ

あるひとあさらかなるものもて
きたりよねして返りことすをとこ
ともひそかにいふなりいひほちて
えつゝるとやかうやうのこと所〳〵
にありけふせちみすれはいを
不用
九日心もとなさにあけぬから舟
をひきつゝのほれとも河の水な
けれはゐさりにのみそゐさるこの
あひたにわたのとまりのあかれ
の所といふところありよねいをな
とこへはをこなひつかくて舟ひ
きのほるになきさの院といふ所
をみつゝゆくその院むかしを思
やりてみれはおもしろかりける
所也しりへなるをかには松の
木ともありなかのにはにはむ
めのはなさけりこゝにひと〳〵の
いはくこれむかしなたかくきこへ
たる

所也故にいつみてのたまほんと
又よ故あかたらのるかうの
中将のよめるよこうけられ
けりおもはくゝろのこころえのけ
うらましとい ようしよめるとこそ
ちかれかいはいふあるを所なく
するうるよめや
　ちよへる梅えあなをいふの
　こゝろのさむしさこそかしこさあれり
又ある人のよめる

　きみなられせをみるやよ梅花
　むかしのまゝられよそかひける
さいひつそみやこのちらほくまよ
ろこむほくのほかくのある人
のあるは京よりやくわしはすよ
みれ人子ともすわきいそわね
しくすてうつみうめるねとそ
あわある人みれ母のよする
ところまをいふきほくむて

のりすこれを見てむかしのこのはゝかなしきにたへすしてなかりしも有てかへる人の子をありしもなくてくるのかなしさといひてそなきけるちゝもこれをきゝていかゝあらんかうやうのこともうたもこのむとてあるにもあらさるへしもろこしもこゝも思ふことにたへぬときのわさとかこよひうとのといふところにとまる

十日さはることありてのほらす

十一日あめいさゝかふりてやみぬかくてさしのほるに東の方に山のよこほれるを見て人にとへはやはたの宮といふこれをきゝてよろこひて人々をかみたてまつる山さきのはしみゆうれしきことかきりなしこゝに相應寺のほとりにしはし舟をとゝめて

かくさたむることありこのてら
のきしほとりに柳おほくあり
あるひとこのやなきのかけの河の
そこにうつれるをみてよめるうた
さゝれ浪よするあやをはあをやきの
かけのいとしてをるかとそみる
十二日山さきにとまれり
十三日なほ山さきに
十四日雨ふるけふくるま京へと
りにやる
十五日けふくるまゐてきたり舟
のむつかしさにふねより人の家
にうつるこの人の家よろこへるや
うにてあるしゝたりこのあるし
のまたあるしのよきをみるに
うたておもほゆいろいろにかへり
ことす家の人のいていりにくけ
ならすゐやゝかなり
十六日けふのようさりつかた京へ

のほるついてよみんれはやなさき
れこれつのちゑまりのおね
ちのろきりはるありくやうわ
ひとのこゝろをそしらぬとそいふ
るかくて堂へいくよしうけつ
よてひとあるしにあかすこよ
しもあるましきわあなさわたち
了のきしはよわたかつるはうへ
たこうくあわくるこれもかつあると
数よろすよちすて草にていはんと
おもつていろきしもせぬちをとよ
月いつこぬ桂かし月のあきまえ
わろち人〳〵のいはくおめいくゝ
こゝのはあすけよあねえふも
ねらよかはすゝきあけやとそれ
ある人のよめるうた
冬夜の月はたれゝさるかへろは
すこするかなもかへゝさわなわ
又ある人のいつる

あかくさのえきさかつる桂すむ
よつをひてもわたりぬるれ
又ある人よめり
桂河わかゝれもかなしね
おもしろきよちかひつるを
京のうすきあかりよ京すあ
ゆおちたほる夜みえて所々
みへ数京のよいやうちてうけ
家よいふてかよいるけり

月のかつらいよくあか数け
ゑゆきこしよわさらはみへ
めくるこほれやよわきいてよ
あつけなつる人のんてかれる
まうくりちるつきこえあきひ
とつへのやうあれてのみそは
あたるれせさるはつよわこと
よものえへつすえさせへり
こよひかくるゝとくこわろつゝ世も
のもいふす

いとゝつらくみゆれと心さへはせ
むとすれていけめいてくちまめ
みつけるかあわほとわよまつさあ
りきいたゝせむとせのうちよ千
らせやまきよんかさへさく
すわるらいかねひしううさ
しわるたほろのみれあわる
まえあねとうんくよ
たわいかぬことちくなかひに
むしきのうちよこのいろつゝう
まかしなんすこれもろとすよ
かつらねてつろはかすしきゝ御
すんさみめいこゝうちてのしろ
かるうちよあほつすきうゝ
つほしこひろつよいしわる
へいうかるう
むさわしもかつぬめをわやとよ
こまのあるこよみるらゝすね

ふにあっあぬやあっじみくさん
みーんのおろのちそよみうらい
ごちくかさしきわれせうや
わゐわろく、ちなしきこと
おぼのれとえつくさすとまれ
かうされとくやゆうん

人まれし一もの𛀙ら
ぬ人の千わのやどに
うまくのあそ千みつ
うゝなしねごそ兮
かはまあうあやあらん
まふうるあん
みしひとあまくのち
いちまみましつは
いはゑのれしまわれ
ちよしや

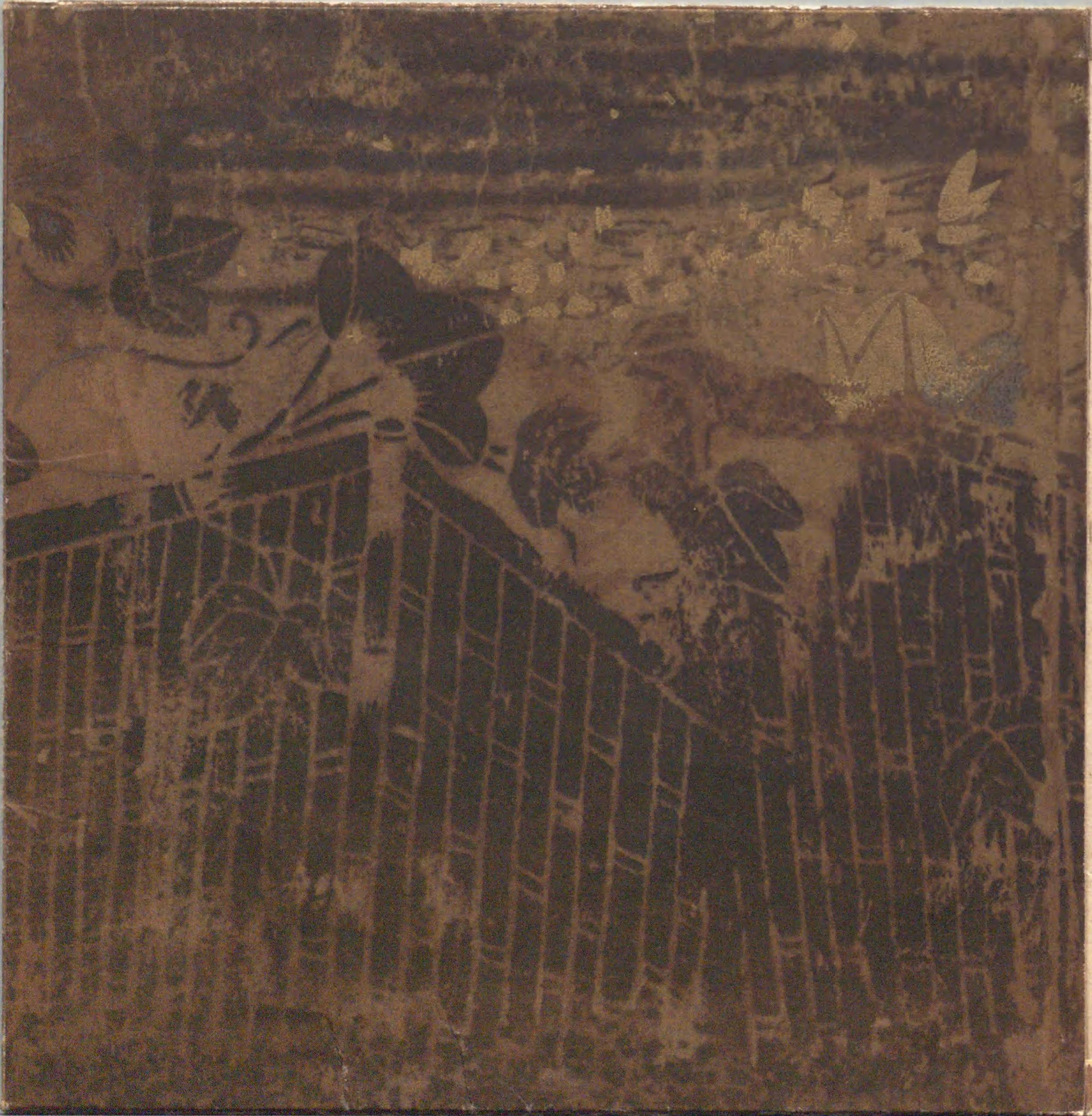
わかれのゝち、ちゝちし
まゝ、とるほつれど
ゑへ、のはあとまれ
ううまれとゝやわてん

女を知モ手跡ノ躰ハ所寫留ノ
誤許ノ輩ハ他手跡多稱モ筆
不謂事哉

文暦二年（乙未）五月十三日（己巳）老病中
雖眼如盲不慮之外見紀氏自筆
本（蓮華王院寶藏本）
竹紙白紙（不打）（無堺）高一尺一寸三分許廣
一尺七寸二分許紙也 廿六枚 無軸
表紙續白紙一枚（端聊折返不立竹）（無紐）
有外題 土左日記 貫之筆
其書様 和哥非別行 定行ニ書之
聊有闕字 哥下無闕字而書後詞
不堪感興自書寫之 昨今二ヶ日
終功 桑門明静

紀氏
延長八年任土左守
在國載五年六年之由
承平四（甲午）五（乙未）年歸京
今年乙未 歴三百一年 紙不朽
損毛字又鮮明也
不讀得所々多只任本書之也

尊経閣叢刊上人日記
原本侯爵前田家藏



まのけ
あめはまわ
こひへん
やは